

中国文学を貫くもの

小田 健太（教育学研究科教科教育専攻）

本書は「Ⅰ」「Ⅱ唐以前」「Ⅲ唐」「Ⅳ唐以後」「Ⅴ」「Ⅵ」の六章から構成されている。「Ⅰ」には、「中国文学における希望と絶望」や「中国文学に現われた人生観」など四篇の文章を収める。「Ⅱ唐以前」には、「新しい慟哭——孔子と「天」——」や、日本でも広く知られている陶淵明について書かれた「陶淵明詩の訓詁」など七篇、「Ⅲ唐」には、李白や杜甫、白居易などについて書かれた十篇が収録されている。「Ⅳ唐以後」では、宋（960～1278）から元（1279～1367）、明（1368～1661）、清（1662～1911）に至るまでの詩や戯曲について述べられている。「Ⅴ」には「芭蕉と杜甫」「啄木讃」など、日本文学にまつわる各篇が収められている。「啄木讃」では、啄木の、

真夜中の

俱知安駅に下りゆきし

女の鬢の古き痕あと

という短歌を引いた上で、「これも私は虚構だと思っている」とコメントを加えている。北海道に住むものとしては、身近に感じる一節である。「Ⅵ」は、「詩と月光」「新しい夕陽」の二篇によって構成されている。各篇は、新聞や全集の月報、跋文など、各種の媒体に発表された文章である。中国唐代（618～906）を中心に、古くは紀元前から、下っては清朝までの文学について広く論じられている。

さて、本書の一つの特徴は、「善意」という言葉が繰り返し用いられていることである。それは、著者が、「中国の文学を貫くもの、それは人間の善意への信頼であると、私はかねがね考えている」（73頁）ことに起因する。「人間の善意への信頼」は、五経の一つである『詩経』からすでに顕著であると述べられている。「最古の文学『詩経』三百五篇の背後にある人生観は、人間はその善意によって、個人としても社会としても、完全に幸福であり得るといふ楽観である」（39頁）とするのがそれである。同じく『詩経』について、「人間をもって人間の努力をこえた運命の支配の下にある微小な存在と見る態度は、この古典ではむしろ微弱である。そうして人間の努力による善意の回復が、常に期待されている」（67頁）とするのも、同様の指摘である。『詩経』と同じく古代の作品集である『楚辞』については、「詩は、しばしば懐疑におちいり、絶望におちいる」としながらも、「それにもかかわらず、それら懐疑と絶望をのりこえて、強くさけびつづけられる自己主張は、善意の回復への期待がなお強烈であることを思わせる。それは運命の支配に

屈服したがる精神である」と述べている。『楚辞』の根底に流れる善意を読み取っているのである。

こうした吉川氏の中国文学観には、異義がとなえられることもある。小倉芳彦氏は、吉川氏の『中国の知慧』（新潮社、1953）に対する書評（『歴史学研究』第169号、1968.9）の中で、吉川氏の言を引用しながら次のように述べている（旧字は新字に改めた）。

「論語をつらぬいて流れるもの、それは要するに、ふてぶてしいまでの人間肯定の精神、……（小倉氏による中略）人間の善意への信頼である」とか、……とくりかえし言われても、そういう善意への信頼とか、絶望を超えた善意というような表現に対して、そういう表現が本来もつべき切実さ、深刻さを感じ取れないのである。

たしかに吉川氏の断定はやや性急かもしれない。そうではあるが、「詩経の詩人は、なかなか絶望しない。したがって呼びかけをやめない」（82頁）、「要するに不幸は、一時的、局部的であり、幸福はやがて回復されねばならない。それが人間の本来である」（同）などといった、古代人の純粋で、また純粋であるだけに強烈な、生きるための思想が存在したであろうことを、吉川氏の記述によって、私たちはたしかに手触りのもとに想像することができる。『詩経』の人々から数千年下ったわれわれに、彼らの望んだ善意が回復されているか。おそらくはされていない。もしかすると、回復すべき善意を追求し続けることこそが、最大の善意であるのかもしれない。

ここまで、鍵語の一つである「善意」を中心に、本書を紹介してきた。『詩経』『楚辞』といった古代の作品集に関する文章の紹介に傾き、具体的な作品を例示することもできなかった。本書は多くの具体的作品を例示した上で、『詩経』『楚辞』以降、清朝までの二千年以上にわたる文学について縦横に論じている。それらについては、ぜひ本書を手にとって読んでみていただきたい。各篇はそれほど長くなく、興味のある時代や、詩人について書かれた文章だけ読むことも可能である。

中国は、はるか紀元前から文学に挑み続けてきた国である。そして、中国の文学が、著者の言うように、善意に貫かれているもの、あるいは少なくとも善意を志向するものであるとすれば、中国には信頼すべき多くの善意が存在することになる。文学とは、名のない多くの享受者のものでもあるのだから。

吉川幸次郎著『詩と月光：中国文学論集』（筑摩書房1964年）